朱日記

泉鏡花

一

「小使(こづかい)、小ウ使。」

程もあらせず、……廊下を急いで、もっとも授業中の遠慮、静(しずか)に教員控所の板戸の前へ敷居越に髯面(ひげづら)……というが頤頬(あごほお)などに貯えたわけではない。不精で剃刀(かみそり)を当てないから、むじゃむじゃとして黒い。胡麻塩頭(ごましおあたま)で、眉の迫った渋色の真正面(まっしょうめん)を出したのは、苦虫と渾名(あだな)の古物(こぶつ)、但し人の好(い)い漢(おとこ)である。

「へい。」

とただ云ったばかり、素気(そっけ)なく口を引結んで、真直(まっすぐ)

に立っている。

「おお、源助か。」

その職員室真中（まんなか）の大卓子（おおテエブル）、向側の椅子（いす）に凭（かか）った先生は、縞（しま）の布子（ぬのこ）、小倉（こくら）の袴（はかま）、羽織は袖（そで）に白墨摺（ずれ）のあるのを背後（うしろ）の壁に遣放（やりぱな）しに更紗（さらさ）の裏を捩（よじ）ってぶらり。髪の薄い天窓（あたま）を真俯向（まうつむ）けにして、土瓶やら、茶碗やら、解（とき）かけた風呂敷包、混雑（ごった）に職員のが散（ち）ばったが、その控えた前だけ整然として、硯箱（すずりばこ）を右手（めて）へ引附け、一冊覚書らしいのを熟（じっ）と視（なが）めていたのが、抜上った額の広い、鼻のすっと隆（たか）い、髯の無い、頤（おとがい）の細い、眉のくっきりした顔を上げた、雑所（ざいしょ）という教頭心得（きょうとうこころえ）。何か落着

かぬ色で、

「こっちへ入れ。」

と胸を張って袴の膝へちゃんと手を置く。意味ありげな体(てい)なり。茶碗を洗え、土瓶に湯を注(さ)せ、では無さそうな処から、小使もその気構(きがまえ)で、卓子(テエブル)の角(かど)へ進んで、太い眉をもじゃもじゃと動かしながら、

「御用で？」

「何は、三右衛門(さんえもん)は。」と聞いた。

これは背の抜群に高い、年紀(とし)は源助より大分少(わか)いが、仔細(しさい)も無かろう、けれども発心をしたように頭髪をすっぺりと剃附(そりつ)けた青道心(あおどうしん)の、いつも莞爾々々(にこにこ)した

滑稽(おど)けた男で、やっぱり学校に居る、もう一人の小使である。

「同役（といつも云う、士(さむらい)の果(はて)か、仲間(ちゅうげん)の上りらしい。）は番でござりまして、唯今水瓶(ただいまみずがめ)へ水を汲込(くみこ)んでおりまするが。」

「水を汲込んで、水瓶へ……むむ、この風で。」

と云う。閉込(しめこ)んだ硝子窓(がらすまど)がびりびりと鳴って、青空へ灰汁(あく)を湛(たた)えて、上から揺(ゆす)って沸立たせるような凄(すさ)まじい風が吹く。

その窓を見向いた片頬(かたほ)に、颯(さっ)と砂埃(すなほこり)を捲(ま)く影がさして、雑所は眉を顰(ひそ)めた。

「この風が、……何か、風……が烈しいから火の用心か。」

と唐突に妙な事を言出した。が、成程、聞く方もその風なれば、さまで不思議とは思わぬ。

「いえ、かねてお諭しでもござりますし、不断十分に注意はしまするが、差当り、火の用心と申すではござりませぬ。……やがて、」

と例の渋い顔で、横手の柱に掛ったボンボン時計を睨むようにじろり。ト十一時……ちょうど半。——小使の心持では、時間がもうちっと経っていそうに思ったので、止まってはおらぬか、とさて瞻めたもので。

——風に紛れて針の音が全く聞えぬ。

　そう言えば、全校の二階、下階（した）、どの教場からも、声一つ、咳（しわぶき）半分響いて来ぬ、一日中、またこの正午（ひる）になる一時間ほど、寂寞（ひっそり）とするのは無い。——それは小児（こども）たちが一心不乱、目まじろぎもせずにお弁当の時を待構えて、無駄な足踏みもせぬからで。静（しずか）なほど、組々の、人一人の声も澄渡って手に取るようだし、広い職員室のこの時計のカチカチなどは、居ながら小使部屋でもよく聞えるのが例の処、ト瞻（みつ）めても針はソッとも響かぬ。羅馬数字（ロオマすうじ）も風の硝子窓のぶるぶると震うのに釣られて、波を揺（ゆす）って見える。が、分銅だけは、

調子を違えず、とうんとうんと打つ——時計は止まったのではない。

「もう、これ午餉（おひる）になりまするで、生徒方が湯を呑みに、どやどやと見えますで。湯は沸（たぎ）らせましたが——いや、どの小児衆（こどもしゅ）も性急で、渇かし切ってござって、突然（いきなり）がぶりと喫（あが）りまするで、気を着けて進ぜませぬと、直きに火傷（やけど）を。」

「火傷を…うむ。」

と長い顔を傾ける。

二

「同役とも申合わせまする事で。」
と対向い(さしむかい)の、可なり年配のその先生さえ少く(わかく)見えるくらい、老実な語(くち)。
「加減をして、うめて進ぜまする。その貴方様(あなたさま)、水をフト失念いたしましたから、精々(せっせ)と汲込んでおりまするが、何か、別して三右衛門(さんえむ)にお使でもございますか、手前ではお間には合い兼ね……」
と言懸けるのを、遮って、傾けたまま頭(かぶり)を掉(ふ)った。
「いや、三右衛門でなくってちょうど可(い)いのだ、あれは剽軽(ひょうきん)だからな。……源助、実は年上のお前を見掛

けて、ちと話があるがな。」

出方が出方で、源助は一倍まじりとする。

先生も少し極(きま)って、

「もっとこれへ寄らんかい。」

と椅子をかたり。卓子(テエブル)の隅を座取って、身体(からだ)を斜(はす)に、袴(はかま)をゆらりと踏開いて腰を落しつける。その前へ、小使はもっそり進む。

「卓子の向う前でも、砂埃(すなツぽこり)に掠(かす)れるようで、話がよく分らん、喋舌(しゃべ)るのに骨が折れる。ええん。」と咳(しわぶき)をする下から、煙草(たばこ)を塡(つ)めて、吸口を卜頬へ当てて、

「酷(ひど)い風だな。」

「はい、屋根も憂慮(きづか)われまする……この二三年と申しとうございまするが、どうでございましょうぞ。五月も半ば、と申すに、北風(ならい)のこう烈(はげ)しい事は、十年以来(このかた)にも、ついぞ覚えませぬ。いくら雪国でも、貴下様(あなたさま)、もうこれ布子から単衣(ひとえもの)と飛びまする処を、今日(こんにち)あたりはどういたして、また襯衣(しゃつ)に股引(ももひき)などを貴下様、下女の宿下り見まするように、古葛籠(ふるつづら)を引覆(ひっくりかえ)しますような事でございまして、ちょっと戸外(おもて)へ出て御覧(ごろう)じませ。鼻も耳も吹切られそうで、何とも凌(しの)ぎ切れませんではございますまいか。

三右衛門なども、鼻の尖(さき)を真赤(まっか)に致して、えらい

猿田彦（さるだひこ）にございます。はは。」

と変哲もない愛想笑（あいそうわらい）。が、そう云う源助の鼻も赤し、これはいかな事、雑所先生の小鼻のあたりも紅（べに）が染（にじ）む。

「実際、厳（きび）しいな。」

と卓子（テエブル）の上へ、煙管（きせる）を持ったまま長く露出（むきだ）した火鉢へ翳（かざ）した、鼠色の襯衣（しゃつ）の腕を、先生ぶるぶると震わすと、歯をくいしばって、引立（ひった）てるようにぐいと擡（もた）げて、床板へ火鉢をどさり。で、足を踏張（ふんば）り、両腕をずいと扱（しご）いて、

「御免を被（こうむ）れ、行儀も作法も云っちゃおられん、遠慮は不沙汰（ぶさた）だ。源助、当れ。」

「はい、同役とも相談をいたしまして、昨日（きのう）にも塞（ふさ）ごうと思いました、部屋（と溜（たまり）の事を云う）の炉（ろ）にまた噛（かじ）りつきますような次第にござります。」と中腰になって、鉄火箸（かなひばし）で炭を開（あら）けて、五徳を摺（ず）って引傾（ひっかた）がった銅の大薬鑵（おおやかん）の肌を、毛深い手の甲でむずと撫（な）でる。

「一杯沸（たぎ）ったのを注（さ）しましょうで、——やがてお弁当でござりましょう。貴下様組は、この時間御休憩で？」

「源助、その事だ。」

「はい。」

と獅噛面（しかみづら）を後へ引込（ひっこ）めて目を据える。

雑所は前のめりに俯向（うつむ）いて、一服吸った後を、口で

ふっふっと吹落して、雁首を取って返して、吸殻を丁寧に灰に突込み、

「閉込んでおいても風が揺って、吸殻一つも吹飛ばしそうでならん。危いよ、こんな日は。」

とまた一つ灰を浴せた。瞳を返して、壁の黒い、廊下を視め、

「可い塩梅に、そっちからは吹通さんな。」

「でも、貴方様まるで野原でござります。お児達の歩行いた跡は、平一面の足跡でござりまするが。」

「むむ、まるで野原……」

と陰気な顔をして、伸上って透かしながら、

「源助、時に、何、今小児（こども）を一人、少し都合があって、お前達の何だ、小使溜（こづかいだまり）へ遣（や）ったっけが、何は、……部屋に居るか。」

「居（お）りまするで、しょんぼりとしましてな。はい、……あの、嬢ちゃん坊ちゃんの事でござりましょう、部屋に居りますでございますよ。」

三

「嬢ちゃん坊ちゃん。」

と先生はちょっと口の裡（うち）で繰返したが、直ぐにその

意味を知って頷いた。今年九歳になる、校内第一の綺麗な少年、宮浜浪吉といって、名まで優しい。色の白い、髪の美しいので、源助はじめ、嬢ちゃん坊ちゃん、と呼ぶのであろう？……

「しょんぼりしている。小使溜に。」

「時ならぬ時分に、部屋へぼんやりと入って来て、お腹が痛むのかと言うて聞いたでござりますが、雑所先生が小使溜へ行っているように仰有ったとばかりで、悄れ返っておりまする。はてな、他のものなら珍らしゅうござりませぬ。この児に限って、悪戯をして、課業中、席から追出されるような事はあるまいが、ど

うしたものじゃ。……寒いで、まあ、当りなさいと、炉の縁へ坐らせまして、手前も胡坐（あぐら）を搔（か）いて、火をほじりほじり、仔細（しさい）を聞きましても、何も言わずに、恍惚（うっとり）したように鬱込（ふさぎこ）みまして、あの可愛げに搔合（かきあわ）せた美しい襟に、白う、そのふっくらとした頤（あご）を附着（くっつ）けて、頻（しき）りとその懐中（ふところ）を覗込（のぞきこ）みますのを、じろじろ見ますと、浅葱（あさぎ）の襦袢（じゅばん）が開（はだ）けまするまで、艶々（つやつや）露も垂れるげな、紅（べに）を溶いて玉にしたようなものを、溢（こぼ）れまするほど、な、貴方様（あなたさま）。」

「むむそう。」

と考えるようにして、雑所はまた頷く。

「手前、御存じの少々近視眼で。それへこう、霞が掛りました工合に、薄い綺麗な紙に包んで持っているのを、何か干菓子ででもあろうかと存じました処。」
「茱萸だ。」と云って雑所は居直る。話がここへ運ぶのを待構えた体であった。
「で、ござりまするな。目覚める木の実で、いや、小児が夢中になるのも道理でござります。」と感心した様子に源助は云うのであった。
　青梅もまだ苦い頃、やがて、李でも色づかぬ中は、実際苺と聞けば、小蕪のように干乾びた青い葉を束ねて売る、黄色な実だ、と思っている、こうした雪国

では、蒼空の下に、白い日で暖く蒸す茱萸の実の、枝も撓々な処など、大人さえ、火の燃ゆるがごとく目に着くのである。

「家から持ってござったか。教場へ出て何の事じゃ、大方そのせいで雑所様に叱られたものであろう。まあ、大人しくしていなさい、とそう云うてやりまして、実は何でござります。……あの児のお詫を、と間を見ておりました処を、ちょうどお召でござりまして、……はい。何も小児でござります。日頃が日頃で、ついぞ世話を焼かした事の無い、評判の児でござりまするから、今日の処は、源助、あの児になりかわりまして御

訴訟。はい、気が小さいかいたして、口も利けずに、とぼんとして、可哀(かわい)や、病気にでもなりそうに見えまするがい。」と揉手(もみで)をする。

「どうだい、吹く事は。酷(ひど)いぞ。」

と窓と一所に、肩をぶるぶると揺(ゆす)って、卓子(テエブル)の上へ煙管(きせる)を棄(す)てた。

「源助。」

と再度更(あらたま)って、

「小児(こども)が懐中(ふところ)の果物なんか、袂(たもと)へ入れさせれば済む事よ。

どうも変に、気に懸(かか)る事があってな、小児どころか、

お互に、大人が、とぼんとならなければ可(い)いが、と思うんだ。

昨日夢を見た。」

と注(つ)いで置きの茶碗に残った、冷(つめた)い茶をがぶりと飲んで、

「昨日な、……昨夜(ゆうべ)とは言わん。が、昼寝をしていて見たのじゃない。日の暮れようという、そちこち、暗くなった山道だ。」

「山道の夢でござりまするな。」

「否(や)、実際山を歩行(ある)いたんだ。それ、日曜さ、昨日は——源助、お前は自(おのず)から得ている。私は本と首引(くびッぴ)き

だが、本草（ほんぞう）が好物でな、知ってる通り。で、昨日ちと山を奥まで入った。つい浮々（うかうか）と谷々へ釣込まれて。

こりゃ途中で暗くならなければ可（い）いが、と山の陰がちと憂慮（きづか）われるような日ざしになった。それから急いで引返したのよ。」

四

「山時分じゃないから人ッ子に逢（あ）わず。また茸狩（たけがり）にだって、あんなに奥まで行（ゆ）くものはない。随分路（みち）でもない処を潜ったからな。三ツばかり谷へ下りては攀上（よじのぼ）

り、下りては攀上りした時は、ちと心細くなった。昨夜(ゆうべ)は野宿かと思ったぞ。
でもな、秋とは違って、日の入(いり)が遅いから、まあ、可(よ)かった。やっと旧道に繞(めぐ)って出たのよ。
今日とは違った嘘のような上天気で、風なんか薬にしたくもなかったが、薄着で出たから晩方は寒い。それでも汗の出るまで、脚絆掛(きゃはんがけ)で、すたすた来ると、幽(かすか)に城が見えて来た。城の方にな、可厭(いや)な色の雲が出ていたには出ていたよ——この風になったんだろう。
その内に、物見の松の梢(こずえ)の尖(さき)が目に着いた。もう目の前の峰を越すと、あの見霽(みはら)しの丘へ出る。……後

は一雪崩にずるずると屋敷町の私の内へ、辷り込まれるんだ、と吻と息をした。ところがまた、知ってる通り、あの一町場が、一方谷、一方覆被さった雑木林で、妙に真昼間も薄暗い、可厭な処じゃないか。」

「名代な魔所でござります。」

「何か知らんが。」

と両手で頤を扱くと、げっそり瘠せたような顔色で、

「一ツきり、洞穴を潜るようで、それまで、ちらちら城下が見えた、大川の細い靄も、大橋の小さな灯も、何も見えぬ。

ざわざわざわざわと音がする。……樹の枝じゃ無い、

右のな、その崖(がけ)の中腹ぐらいな処を、熊笹(くまざさ)の上へむくむくと赤いものが湧(わ)いて出た。幾疋(いくひき)となく、やがて五六十、夕焼がそこいらを胡乱(うろ)つくように……皆(みんな)猿だ。

丘の隅にゃ、荒れたが、それ山王(さんのう)の社(やしろ)がある。時々山奥から猿が出て来るという処だから、その数の多いにはぎょっとしたが――別に猿というに驚くこともなし、また猿の面(つら)の赤いのに不思議はないがな、源助。

どれもこれも、どうだ、その総身の毛が真赤(まっか)だろう。

しかも数が、そこへ来た五六十疋という、それはばかりじゃない。後へ後へと群(むらが)り続いて、裏山の峰へ尾を曳(ひ)いて、遥(はる)かに高い処から、赤い滝を落し懸けたの

が、岩に潜（くぐ）ってまた流れる、その末の開いた処が、目の下に見える数よ。最も遠くの方は中絶えして、一ツ二ツずつ続いたんだが、限りが知れん、幾百居るか。で、何の事はない、虫眼鏡で赤蟻（あかあり）の行列を山へ投懸けて視（なが）めるようだ。それが一ツも鳴かず、静まり返って、さっさっさっと動く、熊笹がざわつくばかりだ。

夢だろう、夢でなくって。夢だと思って、源助、まあ、聞け。……実は夢じゃないんだが、現在見たと云ってもほんとにはしまい。」

源助はこれを聞くと、いよいよ渋って、頤（あご）の毛をすくすくと立てた。

「はあ。」

と息を内へ引きながら、

「随分、ほんとうにいたします。場所がらでござりまするで。雑所様、なかなか源助は疑いませぬ。」

「疑わん、ほんとに思う。そこでだ、源助、ついでにもう一ツほんとにしてもらいたい事がある。

そこへな、背後（うしろ）の、暗い路をすっと来て、私に、ト並んだと思う内に、大跨（おおまた）に前へ抜越（ぬけこ）したものがある。

……

山遊びの時分には、女も駕籠（かご）も通る。狭くはないから、肩摺（かたず）れるほどではないが、まざまざと足が並んで、

はっと不意に、こっちが立停(たちど)まる処を、抜けた。下闇(したやみ)ながら——こっちももう、僅(わず)かの処だけれど、赤い猿が夥(おびただ)しいので、人恋しい。

で透かして見ると、判然(はっきり)とよく分った。

それも夢かな、源助、暗いのに。——

裸体(はだか)に赤合羽(あかがっぱ)を着た、大きな坊主だ。」

「へい。」と源助は声を詰めた。

「真黒(まっくろ)な円い天窓(あたま)を露出(むきだし)でな、耳元を離した処へ、その赤合羽の袖を鯱子張(しゃちこば)らせる形に、大(おおき)な肱(ひじ)を、ト鍵形(かぎなり)に曲げて、柄の短い赤い旗を飜々(ひらひら)と見せて、しゃんと構えて、ずんずん通る。……

旗(はた)は真赤(まっか)に宙を煽(あお)つ。

まさかとは思う……ことにその言った通り人恋しい折からなり、対手(あいて)の僧形(そうぎょう)にも何分(なにぶん)か気が許されて、

（御坊、御坊。）

と二声ほど背後(うしろ)で呼んだ。」

五

「物凄(ものすご)さも前(さき)に立つ。さあ、呼んだつもりの自分の声が、口へ出たか出んか分らないが、一も二もない、呼んだと思うと振向いた。

顔は覚えぬが、頤（あご）も額も赤いように思った。

（どちらへ？）

と直ぐに聞いた。

ト竹を破（わ）るような声で、

（城下を焼きに参るのじゃ。）と言う。ぬいと出て脚許（あしもと）へ、五つ六つの猿が届いた。赤い雲を捲（ま）いたようにな、源助。」

「…………」小使は口も利かず。

「その時、旗を衝（つ）と上げて、

（物見からちと見物なされ。）と云うと、上げたその旗を横に、飜然（ひらり）と返して、指したと思えば、峰に並んだ

向うの丘の、松の梢へ颯と飛移ったかと思う、旗の煽つような火が松明を投附けたように※［＃「火＋發」、463-5］と燃え上る。顔も真赤に一面の火になったが、遥かに小さく、ちらちらと、ただやっぱり物見の松の梢の処に、丁子頭が揺れるように見て、気が静ると、坊主も猿も影も無い。赤い旗も、花火が落ちる状になくなったんだ。

小児が転んで泣くようだ、他愛がないじゃないか。さてそうなってから、急に我ながら、世にも怯えた声を出して、

（わっ。）と云ってな、三反ばかり山路の方へ宙を飛ん

で遁出（にげだ）したと思え。

はじめて夢が覚めた気になって、寒いぞ、今度は。がちがち震えながら、傍目（わきめ）も触（ふ）らず、坊主が立ったと思う処は爪立足（つまだちあし）をして、それから、お前、前の峰を引掻（ひっか）くように駆上（かけあが）って、……ましぐらにまた摺落（ずりお）ちて、見霽（みはら）しへ出ると、どうだ。夜が明けたように広々として、崖のはずれから高い処を、乗出して、城下を一人で、月の客と澄まして視（なが）めている物見の松の、ちょうど、赤い旗が飛移った、と、今見る処に、五日頃の月が出て蒼白（あおじろ）い中に、松の樹はお前、大蟹（おおがに）が海松房（みるぶさ）を引被（ひっかず）いて山へ這出（はいで）た形に、しっとりと濡れて薄靄（うすもや）が

絡(まと)っている。遥かに下だが、私の町内と思うあたりを……場末で遅廻りの豆腐屋の声が、幽(かすか)に聞えようというのじゃないか。

話にならん。いやしくも小児(こども)を預って教育の手伝もしようというものが、まるで狐に魅(つま)れたような気持で、……家内にさえ、話も出来ん。

帰って湯に入って、寝たが、綿(わた)のように疲れていながら、何か、それでも寝苦(ねぐるし)くって時々早鐘を撞(つ)くような音が聞えて、吃驚(びっくり)して目が覚める、と寝汗でぐっちょり、それも半分は夢心地さ。

明方からこの風さな。」

「正寅の刻からでございました、海嘯のように、どっと一時に吹出しましたに因って存じておりまする。」

と源助の言つき、あたかも口上。何か、恐入っている体がある。

「夜があけると、この砂煙。でも人間、雲霧を払った気持だ。そして、赤合羽の坊主の形もちらつかぬ。やがて忘れてな、八時、九時、十時と何事もなく課業を済まして、この十一時が読本の課目なんだ。

な、源助。

授業に掛って、読出した処が、怪訝い。消火器の説明がしてある、火事に対する種々の設備のな。しかし

もうそれさえ気にならずに業をはじめて、ものの十分も経（た）ったと思うと、入口の扉を開けて、ふらりと、あの児（こ）が入って来たんだ。」

「へい、嬢ちゃん坊ちゃんが。」

「そう。宮浜がな。おや、と思った。あの児は、それ、墨の中に雪だから一番目に着く。……朝、一二時間ともちゃんと席に着いて授業を受けたんだ。――この硝子窓（がらすまど）の並びの、運動場のやっぱり窓際に席があって、……もっとも二人並んだ内側の方だが。さっぱり気が着かずにいた。……成程、その席が一ツ穴になっている。

また、箸（はし）の倒れた事でも、沸返（にえかえ）って騒立つ連中が、一人それまで居なかったのを、誰もいッつけ口をしなかったも怪（あやし）いよ。

ふらりと廊下から、時ならない授業中に入って来たので、さすがに、わっと動揺（どよ）めいたが、その音も戸外（おもて）の風に吹攫（ふきさら）われて、どっと遠くへ、山へ打（ぶ）つかるように持って行（ゆ）かれる。口や目ばかり、ばらばらと、動いて、騒いで、小児等（こどもら）の声は幽（かすか）に響いた。……」

六

「私も不意だから、変に気を抜かれたようになって、とぼんと、あの可愛らしい綺麗な児を見たよ。密と椅子の傍へ来て、愛嬌づいた莞爾した顔をして、

（先生、姉さんが。）

と云う。――姉さんが来て、今日は火が燃える、大火事があって危ないから、早仕舞にしてお帰りなさい。先生にそうお願いして、と言いますから……家へ帰らして下さい、と云うんです。含羞む児だから、小さな声して。

　風はこれだ。

聞えないで僥倖。ちょっとでも生徒の耳に入ろうも

のなら、壁を打抜(ぶちぬ)く騒動だろう。もうな、火事と、聞くと頭から、ぐらぐらと胸へ響いた。
騒がぬ顔して、皆(みんな)には、宮浜が急に病気になったから今手当をして来る。かねて言う通り静(しずか)にしているように、と言聞かしておいて、精々落着いて、まず、あの児をこの控所へ連れ出して来たんだ。
処で、気を静めて、と思うが、何分、この風が、時々、かっと赤くなったり、黒くなったりする。な源助どうだ。こりゃ。」
と云う時、言葉が途切れた。二人とも目を据えて

瞻(みまも)るばかり、一時(ひとしきり)、屋根を取って挫(ひし)ぐがごとく吹き撲(なぐ)る。

「気が騒いでならんが。」

と雑所は、しっかと腕組をして、椅子の凭(かか)りに、背中を摺着(すりつ)けるばかり、びたりと構えて、

「よく、宮浜に聞いた処が、本人にも何だか分らん、姉さんというのが見知らぬ女で、何も自分の姉という意味では無いとよ。

はじめて逢ったのかと、尋ねる、とそうではない。

この七日(なぬか)ばかり前だそうだ。

授業が済んで帰るとなる、大勢列を造って、それな、

門まで出る。足並を正さして、私が一二と送り出す……

するとこの頃塗直した、あの蒼（あお）い門の柱の裏に、袖口を口へ当てて、小児（こども）の事で形は知らん。頭髪（かみ）の房々とあるのが、美しい水晶のような目を、こう、俯目（ふしめ）ながら清（すず）しゅう瞪（みは）って、列を一人一人見遁（みのが）すまいとするようだっけ。

物見の松はここからも見える……雲のようなはそればかりで、よくよく晴れた暖い日だったと云う……この十四五日、お天気続きだ。

私も、毎日門外まで一同を連出すんだが、七日前に

も二日こっちも、ついぞ、そんな娘を見掛けた事はない。しかもお前、その娘が、ちらちらと白い指でめんない千鳥をするように、手招きで引着けるから、うっかり列を抜けて、その傍へ寄ったそうよ。それを私は何も知らん。

(宮浜の浪ちゃんだねえ。)

とこの国じゃない、本で読むような言で聞くとさ。頷くと、

(好いものを上げますから私と一所に、さあ、行きましょう、皆に構わないで。)

と、私等を構わぬ分に扱ったは酷い！　なあ、源助。

で、手を取られるから、ついて行(ゆ)くと、どこか、学校からさまで遠くはなかったそうだ。荒れには荒れたが、大きな背戸へ裏木戸から連込んで、茱萸(ぐみ)の樹の林のような中へ連れて入った。目の眶(ふち)も赤らむまで、ほかほかとしたと云う。で、自分にも取れば、あの児にも取らせて、そして言う事が妙ではないか。

(沢山(たんと)お食(あが)んなさいよ。皆(みんな)、貴下(あなた)の阿母(おっか)さんのような美しい血になるから。)

と言ったんだそうだ。土産にもくれた。帰って誰が下すった、と父(おやじ)にそう言いましょうと、聞くと、

(貴下のお亡(なく)なんなすった阿母(おっかさん)のお友だちです。)

と言ったってな。あの児の母親はなくなった筈(はず)だ。が、ここまではとにかく無事だ、源助。その婦人が、今朝また、この学校へ来たんだとな。」

源助は、びくりとして退(さが)る。

「今度は運動場。で、十時の算術が済んだ放課の時だ。風にもめげずに皆(みんな)駆出すが、ああいう児だから、一人で、それでも遊戯さな……石盤へこう姉様(あねさま)の顔を描(か)いていると、硝子戸越(がらすどごし)に……夢にも忘れない……その美しい顔を見せて、外へ出るよう目で教える……一度逢ったばかりだけれども、小児は一目顔を見ると、もうその心が通じたそうよ。」

七

「宮浜はな、今日は、その婦人が紅(あか)い木(こ)の実の簪(かんざし)を挿していた、やっぱり茱萸(ぐみ)だろうと云うが、果物の簪は無かろう……小児(こども)の目だもの、珊瑚(さんご)かも知れん。

そんな事はとにかくだ。

直ぐに、嬉々(いそいそ)と廊下から大廻りに、ちょうど自分の席の窓の外。その婦人の待っている処へ出ると、それ、散々に吹散らされながら、小児が一杯、ふらふらしているだろう。

源助、それ、近々に学校で——やがて暑さにはなるし——余り青苔（あおごけ）が生えて、石垣も崩れたというので、井戸側（いどがわ）を取替えるに、石の大輪（おおわ）が門の内にあったのを、小児だちが悪戯（いたずら）に庭へ転がし出したのがある。——あれだ。

大人なら知らず、円くて辷（すべ）るにせい、小児が三人や五人ではちょっと動かぬ。そいつだが、婦人が、あの児（こ）を連れて、すっと通ると、むくりと脈を打ったように見えて、ころころと芝の上を斜違（はすっか）いに転がり出した。（やあい、井戸側が風で飛ばい。）か、何か、哄（どっ）と吶喊（とき）を上げて、小児が皆（みんな）それを追懸けて、一団（ひとかたまり）に黒く

なって駆出すと、その反対の方へ、誰にも見着けられないで、澄まして、すっと行ったと云うが、どうだ、これも変だろう。

横手の土塀際の、あの棕櫚(しゅろ)の樹の、ばらばらと葉が鳴る蔭へ入って、黙って背(せなか)を撫(な)でなぞしてな。

そこで言聞かされたと云うんだ。

（今に火事がありますから、早く家(うち)へお帰んなさい、先生にそう云って。でも学校の教師さん、そんな事がありますかッて肯(き)きなさらないかも知れません。黙ってずんずん帰って可(よ)うござんす。怪我(けが)には替えられません。けれども、後で叱られると不可(いけ)ませんから、な

りたけお許しをうけてからになさいましよ。

時刻はまだ大丈夫だとは思いますが、そんな、こんなで帰りが遅れて、途中、もしもの事があったら、これをめしあがれよ。そうすると烟に捲かれませんから。）

とそう云ってな。……そこで、袂から紙包みのを出して懐中へ入れて、圧えて、こう抱寄せるようにして、そして襟を掻合せてくれたのが、その茱萸なんだ。

（私がついていられると可いんだけれど、姉さんは、今日は大事な日ですから。）

と云う中にも、風のなぐれで、すっと黒髪を吹いて、

まるで顔が隠れるまで、むらむらと懸（かか）る、と黒雲が走るようで、はらりと吹分ける、と月が出たように白い頬が見えたと云う……

けれども、見えもせぬ火事があると、そんな事は先生には言憎（いいにく）い、と宮浜が頭（かぶり）を振ったそうだ。

（では、浪ちゃんは、教師さんのおっしゃる事と、私の言う事と、どっちをほんとうだと思います。——）

こりゃ小児（こども）に返事が出来なかったそうだが、そうだろう……なあ、無理はない、源助。

（先生のお言（ことば）に嘘はありません。けれども私の言う事はほんとうです……今度の火事も私の気でどうにも

なる。――私があるものに身を任せれば、火は燃えません。そのものが、思（おもい）の叶（かな）わない仇（あだ）に、私が心一つから、沢山の家も、人も、なくなるように面当（つらあ）てにしますんだから。

まあ、これだって、浪ちゃんが先生にお聞きなされば、自分の身体（からだ）はどうなってなりとも、人も家も焼けないようにするのが道だ、とおっしゃるでしょう。

殿方の生命（いのち）は知らず、女の操というものは、人にも家にもかえられぬ。……と私はそう思うんです。そう私が思う上は、火事がなければなりません。今云う通り、私へ面当てに焼くのだから。

まだ私たち女の心は、貴下（あなた）の年では得心が行（ゆ）かないで、やっぱり先生がおっしゃるように、我身を棄てても、人を救うが道理のように思うでしょう。いいえ、違います……殿方の生命は知らず。）

と繰返して、

（女の操というものは。）と熟（じっ）と顔を凝視（みつ）めながら、

（人にも家にも代えられない、と浪ちゃん忘れないでおいでなさい。今に分ります……紅（あか）い木の実を沢山（たんと）食べて、血の美しく綺麗な児（こ）には、そのかわり、火の粉も桜の露となって、美しく降るばかりですよ。さ、いらっしゃい、早く。気を着けて、私の身体（からだ）も大切な日

ですから。）

と云う中（うち）にも、裾（すそ）も袂も取って、空へ頭髪（かみ）ながら吹上げそうだったたってな。これだ、源助、窓硝子（まどがらす）が波を打つ、あれ見い。」

八

雑所先生は一息吐（つ）いて、

「私が問うのに答えてな、あの宮浜はかねて記憶の可（い）い処を、母のない児（こ）だ。——優しい人の言う事は、よくよく身に染みて覚えたと見えて、まるで口移しに

諳誦（あんしょう）をするようにここで私に告げたんだ。が、一々、ぞくぞく膚（はだ）に粟（あわ）が立った。けれども、その婦人の言う、謎のような事は分らん。

そりゃ分らんが、しかし詮（せん）ずるに火事がある一条だ。

（まるで嘘とも思わんが、全く事実じゃなかろう、ともかく、小使溜（こづかいだまり）へ行って落着いていなさい、ちっと熱もある。）

額を撫（な）でて見ると熱いから、そこで、あの児をそららへ遣（や）ってよ。

さあ、気になるのは昨夜（ゆうべ）の山道の一件だ。……赤い猿、赤い旗な、赤合羽を着た黒坊主よ。」

「緋、緋の法衣を着たでござります、赤合羽ではござりません。魔、魔の人でござりますが。」とガタガタ胴震いをしながら、躾めるように言う。

「さあ、何か分らぬが、あの、雪に折れる竹のように、バシリとした声して……何と云った。

(城下を焼きに参るのじゃ。)

源助、宮浜の児を遣ったあとで、天窓を引抱えて、こう、風の音を忘れるように沈と考えると、ひょい、と火を磨るばかりに、目に赤く映ったのが、これなんだ。」

と両手で控帳の端を取って、斜めに見せると、楷書

で細字(さいじ)に認(したた)めたのが、輝くごとく、もそりと出した源助の顔に赫(か)ッと照って見えたのは、朱で濃く、一面の文字(もんじ)である。

「へい。」

「な、何からはじまった事だか知らんが、ちょうど一週間前から、ふと朱でもって書き続けた、こりゃ学校での、私の日記だ。

昨日(きのう)は日曜で抜けている。一週間。」

と颯(さつ)と紙が刎(は)ねて、小口をばらばらと繰返すと、戸外(おもて)の風の渦巻に、一ちぎれの赤い雲が卓子(テエブル)を飛ぶ気勢(けはい)する。

「この前の時間にも、（暴風）に書いて消して（烈風）をまた消して（颶風）なり、と書いた、やっぱり朱で、見な……

しかも変な事には、何を狼狽たか、一枚半だけ、罫紙で残して、明日の分を、ここへ、これ（火曜）としたぜ。」

と指す指が、ひッつりのように、びくりとした。

「読本が火の処……源助、どう思う。他の先生方は皆な私より偉いには偉いが年下だ。校長さんもずッとお少い。

こんな相談は、故老に限ると思って呼んだ。どうだ

ろう。万一の事があるとなら、あえて宮浜の児一人でない。……どれも大事な小児(こども)たち——その過失(あやまち)で、私が学校を止(や)めるまでも、地鞴(じだんだ)を踏んでなりと直ぐに生徒を帰したい。が、何でもない事のようで、これがまた一大事だ。いやしくも父兄が信頼して、子弟の教育を委(ゆだ)ねる学校の分として、婦(おんな)、小児(こども)や、茱萸(ぐみ)ぐらいの事で、臨時休業は沙汰(さた)の限りだ。

　私一人の間抜(まぬけ)で済まん。

第一そような迷信は、任(にん)として、私等が破って棄ててやらなけりゃならんのだろう。そうかッてな、もしやの事があるとすると、何より恐ろしいのはこの風だ

よ。ジャンと来て見ろ、全市瓦（かわら）は数えるほど、板葺屋根（いたぶきやね）が半月の上も照込んで、焚附（たきつけ）同様。——何と私等が高台の町では、時ならぬ水切（みずぎれ）がしていようという場合ではないか。土の底まで焼抜（やきぬ）けるぞ。小児たちが無事に家へ帰るのは十人に一人もむずかしい。

　思案に余った、源助。気が気でないのは、時が後（おく）れて驚破（すわ）と言ったら、赤い実を吸え、と言ったは心細い——一時半時（いっときはんじ）を争うんだ。もし、ひょんな事があるとすると——どう思う、どう思う、源助、考慮（かんがえ）は。」

「尋常（ただ）、尋常ごとではござりません。」と、かッと卓子（テエブル）に拳（こぶし）を掴（つか）んで、

「城下の家の、寿命が来たんでござりましょう、争われぬ、争われぬ。」
と半分目を眠って、盲目（めくら）がするように、白眼（しろまなこ）で首を据えて、天井を恐ろしげに視（なが）めながら、
「ものはあるげにござりまして……旧藩頃の先主人が、夜学の端に承わります。昔その唐（から）の都の大道を、一時（あるとき）、その何でござりまして、怪しげな道人が、髪を捌（さば）いて、何と、骨だらけな蒼（あお）い胸を岸破々々（がばがば）と開けました真中（まんなか）へ、人（ひ）、人（ひと）という字を書いたのを掻開（かっぱだ）けて往来中駆廻ったげでござります。いつかも同役にも話した事でござりまするが、何の事か分りません。唐の都でも、皆（みん）な

が不思議がっておりますると、その日から三日目に、年代記にもないほどな大火事が起りまして。」
「源助、源助。」
と雑所大きに急(せ)いて、
「何だ、それは。胸へ人という字を書いたのは。」とかかる折から、自分で考えるのがまだるこしそうであった。
「へい、まあ、ちょいとした処、早いが可(よ)うございます。ここへ、人と書いて御覧じやりまし。」
風の、その慌(あわただ)しい中でも、対手(あいて)が教頭心得の先生だけ、もの問(とわ)れた心の矜(ほこり)に、話を咲せたい源助が、薄

汚れた襯衣（しゃつ）の鈕（ぼたん）をはずして、ひくひくとした胸を出す。

雑所も急心（せきごころ）に、ものをも言わず有合わせた朱筆（しゅふで）を取って、乳を分けて朱（あか）い人。と引かれて、カチカチと、何か、歯をくいしめて堪（こら）えたが、突込む筆の朱が刎（は）ねて、勢（いきおい）で、ぱっと胸毛に懸（かか）ると、火を曳（ひ）くように毛が動いた。

「あ熱々（つつ）！」

と唐突（だしぬけ）に躍り上って、とんと尻餅を支（つ）くと、血声を絞って、

「火事だ！　同役、三右衛門、火事だ。」と喚（わめ）く。

「何だ。」

と、雑所も棒立ちになったが、物狂わしげに、
「なぜ、投げる。なぜ茱萸（ぐみ）を投附ける。宮浜。」
と声を揚げた。廊下をばらばらと赤く飛ぶのを、浪吉が茱萸を擲（なげう）つと一目見たのは、矢を射るごとく窓硝子（まどがらす）を映（さ）す火の粉であった。

途端に十二時、鈴（りん）を打つのが、ブンブンと風に響くや、一つずつ十二ケ所、一時に起る擂半（すりばん）鉦、早鐘。早や廊下にも烟（けむり）が入って、暗い中から火の空を透かすと、学校の蒼（あお）い門が、真紫に物凄（ものすご）い。

この日の大火は、物見の松と差向う、市の高台の野にあった、本願寺末寺の巨刹（おおでら）の本堂床下から炎を上げ

た怪し火で、ただ三時（みとき）が間に市の約全部を焼払った。

烟は風よりも疾（と）く、火は鳥よりも迅（はや）く飛んだ。

人畜の死傷少からず。

火事の最中、雑所先生、袴（はかま）の股立（ももだち）を、高く取ったは効々（かいがい）しいが、羽織も着ず……布子の片袖引断（ひっちぎ）れたなりで、足袋跣足（たびはだし）で、据眼（すえまなこ）の面藍（おもてあい）のごとく、火と烟の走る大道を、蹌踉（ひょろひょろ）と歩行（ある）いていた。

屋根から屋根へ、――樹の梢（こずえ）から、二階三階が黒烟りに漾（ただよ）う上へ、飜々（ひらひら）と千鳥に飛交う、真赤（まっか）な猿の数を、行（ゆ）く行く幾度も見た。

足許（あしもと）には、人も車も倒れている。

とある十字街へ懸(かか)った時、横からひょこりと出て、斜(はす)に曲り角へ切れて行(ゆ)く、昨夜(ゆうべ)の坊主に逢った。同じ裸に、赤合羽を着たが、こればかりは風をも踏固めて通るように確(しか)とした足取であった。

が、赤旗を捲(ま)いて、袖へ抱くようにして、いささか逡巡(しゅんじゅん)の体(てい)して、

「焼け過ぎる、これは、焼け過ぎる。」

と口の裡(うち)で呟(つぶや)いた、と思うともう見えぬ。顔を見られたら、雑所は灰になろう。

垣も、隔ても、跡はないが、倒れた石燈籠(いしどうろう)の大(おおき)なのがある。何某(なにがし)の邸(やしき)の庭らしい中へ、烟に追われて入

ると、枯木に夕焼のしたような、火の幹、火の枝になった大樹の下（もと）に、小さな足を投出して、横坐りになった、浪吉の無事な姿を見た。

学校は、便宜に隊を組んで避難したが、皆ちりちりになったのである。

と見ると、恍惚（うっとり）した美しい顔を仰向けて、枝からばらばらと降懸（ふりかか）る火の粉を、霰（あられ）は五合（ごんご）と掬（すく）うように、綺麗な袂（たもと）で受けながら、

「先生、沢山に茱萸が。」

と云って、﨟長（ろうた）けるまで莞爾（にっこり）した。

雑所は諸膝（もろひざ）を折って、倒れるように、その傍（かたわら）で息

を吐いた。が、そこではもう、火の粉は雪のように、袖へ掛っても、払えば濡れもしないで消えるのであった。

明治四十四（一九一一）年一月

底本：「泉鏡花集成４」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９５（平成７）年10月24日第1刷発行
　　　２００４（平成16）年３月20日第２刷発行
入力：土屋隆
校正：門田裕志
２００５年11月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。